
遊戯王GX どうしてこうなった.....

にーと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX どうしてこうなった……

【Nコード】

N67350

【作者名】

にーと

【あらすじ】

友達居なくてタッグフォース（TF）やり込んでた俺がGXの世界に！？ ほぼすべてのカードを網羅した俺に敵はない？ すみませんちよっと調子に乗りすぎました。許してください出来心だったんです。

ブログ（前書き）

性懲りもなく投稿。

更新速度はかなり遅い出すよ？

ブログ

俺の名前は山田和希、やまだかずき田舎町に住んでる中学生だ。

身長は165?で体型はやややせ気味、自分で言うのも何だがそれなりにイケメンの部類にはいると思う。ただ、少しオタクが入ってるせいでモテたことはないが。つか田舎にはオタクが少ないんだよ、おかげで友達すら(r y)

趣味は遊戯王、趣味ってレベルじゃないくらい嵌り込んでいる。しかし。田舎過ぎてカードショップなんて物はない。それどころか遊戯王を扱ってる店は家から自転車ですら最低一時間はかかるし、品揃えも良いとは言えない(俺は通販を使ってるけど)。そんな環境じゃ周りで遊戯王やってる奴なんて居ないし、誘っても敬遠される。

だから俺は、やる気のない弟にデッキを貸してデュエルするか、遊戯王オンラインぐらいでしか他人とデュエルすることが出来ない。オンラインは新カードの実装が遅いから最近ではもっぱらTF5をやってるんだが、最近はCPUのパターンをおぼえてしまってる得意なデッキを使うのがつまらなくなってきたところだ。仕方がないからネタデッキの構築に一日の大半を費やしている。

今日も遅くまでデッキの構想を練ってから、遊戯王ブログの更新をして寝た。……はずだったのに。

「どうしてこうなった……」

(あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

『朝起きてニュースを見ると某社長が
高笑いしながら新しいテーマパークの見所を語っていた』

な… 何を言ってるのか わからねーと思うが
おれも何をされたのかわからなかった

頭がどうにかなりそうだった…

コスプレだとかソツクリさんだとか
そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…)

(……まあ、ネタは此処までにして。…ホントに夢じゃないのか。
ほんとに？ 頬をつねってみる。痛い、当たり前か夢じゃないんだ
から。夢じゃない……ほんとに？ 頬を……)(以下無限ループ

(そうだ！デツキは！)

急いで部屋に戻る、カードに埋め尽くされていた押入はスツカラ
カンになっていて代わりに見覚えのない鞆が一つと高級そうな木箱
が置いてあった。

鞆を開けるとそこには……

(さっき見たのは忘れよう。さっき見たのって何だっけ？ まあ忘
れるぐらいの小さな事だな、うん。……でも、もうこの鞆はのぞき
込まない方がいいな)

中に何かが入っているかのようにふくらんでいるこの鞆に手を突
っ込んでみると手が底に当たらずに肩まで飲み込まれてしまった。

（あーこう言うの、どっかの本とかであるよね）

次は中にカードが入ってるイメージで手を入れると確かに触れる感覚がある。それを掴んで取り出してみる。

ブルーアイズホワイトドラゴン

（青眼の白龍。想像したカードが出てくるのか、ちょっといつもと違うな？ カードの素材が……何だ？ 手触りは紙だが曲げても戻るし堅い。それになんだか威圧感が…… って青眼の白龍は世界に四枚しかないはずじゃん。持ってたらずくね？）

カードを鞆に投げ入れると、隣に置いてあった木箱を取る。開けてみるとそこには金色の決闘盤デュエルディスクが……。

（派手、すぎるわー！！ ってこのフォルムはTF？ まさかこの鞆も！）

もう一度手を突っ込むと今度は迷わず取り出す、今度は束だ。

（俺のデッキだ間違いない。しかもこれはTFのカードがそろっている。しかもOCG化してないカードや原作効果、アニメ効果のカードまである、ん？ コレはスターダスト？ 何で融合モンスターに……。いや、どこかの二次創作であつたなこう言うの、まあバランス調整か。シンクロバースジョンもあるけどコレはコレで面白そうだな、後で使ってみるか）

さらに鞆をあさりながら決闘盤がTF3までのだったならなんと考えてると堅い物が手に触れた。まさかと思って取り出してみると……

「出たよ……オシリスレッド、もしかして……」

他にもあるのかと思ってあさってみるとスタロ欲しさに買ったホビーの決闘盤が出てきた。こっちもちやんとソリッドヴィジョンである。と、言うことで遊星verの決闘盤を残して他のディスクは直すとデッキの編集を始める。

（こっちの禁止制限ルールはどうなってるんだ？ 調べないとな。つか、今はどの時代なんだ？ ま、それは後日調べていくか……）

（……今更夢だったーなんて言われたら自殺するかもな俺）

ちょっと浮かれすぎていたのかも知れない。本当に夢のような体験に馬鹿なことを考えてしまっぐらいには。

プロローグ（後書き）

シンクロモンスの扱いについては阿音さんの所みたいに扱います。

ちなみにTFなどの遊戯王関連商品は無くなっていました。

第一話 俺とカードと実技試験（前書き）

やっとデュエルです。ネタデッキって面白いですね、よく使ってます。でも、相手がガチならこっちもガチデッキです、遊んでなんか居られません。

……まあ作者はかなり遊戯王弱いんでどっちにしても負けますが。

第一話 俺とカードと実技試験

デュエルアカデミア実技試験当日。朝からデッキやデュエルディスクの確認をし、帽子を目深に被ってホテルを出る、ちなみに帽子は海馬コーポレーションのロゴ入りブラックだ。寝坊しても問題ないようにちゃんと試験会場の近くを借りて泊まっていたので、時間にはまだまだ余裕がある。

……実はこの一年半でデュエルモンスターズを止めようかと何度も思った。なぜかって言うと、この世界のデュエリスト達のレベルが低すぎるからだ。

相手にならない、つまらない。これならあつちで遊戯王オンラインやってた方がずっと楽しい。しかし、戻る方法も解らないし、そもそも戻れるのかすら不明である。

一応、こっちのデュエリストが弱いことにも理由がある。

まず、レアカードの価値が高い。元の世界では普通だった打ち出の小槌ですら四桁になるっていうのはあんまりだと思う。他にも、マシユマロン五桁、光の護封剣六桁、サイバードラゴン七桁など。馬鹿げた数字になっていたりする。

こっちでは基本的に絶版になったカードはもう出てこないし、初期のカードは大抵高く売れる。強欲な壺や天使の施しなんかのカードはまだ絶版になってないが、それでも四桁を維持し続けている。

そして、デッキの構築が悪い。良いカードが高いのは解るが、こ
ちではありとあらゆる場合を想定してそれに対するカードを詰め
込むのが定説になっている。たとえば相手の強欲な壺を無効にし二
枚ドロウする、『壺盗み』、確かに使えたら良いだろうが、出来な
かったら入ってるのが無駄なだけである。

他にも、発動するのが相手に依存している微妙なカードだったり。
これは三枚積まないと駄目だろうって言うカードが一枚だったりす
るからお手上げだ。

最後に『運』だ。こつちの世界では勝敗の半分以上は運で決まる
と言っても過言ではない。正直運さえあれば必須カードが一枚でも
十分だったりするぐらいだ。

この運も、人によってばらつきがある。やっぱりスゴい奴は手札
一枚から逆転とかするし、キーカードが初手に来たりもするが、弱
い奴はここぞ！ って時に使えないカードを引いたりする。

……まあ、俺もこつちに来てからチート体質になったみたいで、
ガチデッキなら後攻ワンキルとか普通に出来てしまうようになって
るんだけど。

ついでに、カードを信じる心！ とか言ったりもするけど、デッ
キはシャッフルしない限り、順番が変わったりしないんだから最後
まで諦めないでやればいいと思うんだが。

そんなこんなで生きる意味を無くした俺だが、結局俺はデュエル
モンスターズを止めなかった。今更止めるには俺は遊戯王には近
すぎたし、止めると何をすればいいか解らなくなるからだ。

しかしこの世界では外を出歩けば、微妙なデュエルが目に入る。
いらいらする、だから特別な事情がない限り俺は家を出歩かずに今

までデッキを弄っていた。

そんなある日、部屋でブログの更新をしていると一通のメールが入った。

今までずっと負け続けてきたけど、このサイトを見てからデッキの安定性を求め続けて、やっと勝つことが出来ました。本当にありがとうございます。

終わりのない絶望に光が差した気がした。そう、相手が弱いなら強くすればいいのである。そこで、育てる人物に会うためのデュエルアカデミアだ。そこなら引き運が強い奴が集まるだろうし、既にGXの主人公組と歳が一緒なのは確認済みだ。

そこにいつて、十代達のデッキを魔改造するのだ。もちろん、素直に弄らせてくれるとは思わないから、徐々に思考を誘導していくんだが……。

さて、会場に着いたみたいだ、どうやって暇をつぶそうかな。ん？ アレは空気男^{三沢}じゃないか。まあ、取りあえず放置かな、ってよく見ればスタンドの方に万丈目や明日香、カイザーもいるな。うーん、だんだん楽しみになってきた。早く始まんないかな、ちゃんと試験用のネタデッキを作ってきたんだし。

《これよりデュエルアカデミア実技試験を行います。一番から九番の人は各ステージへ上がってください》

お、始まるか。俺はもちろん一番だ、人生の殆どを遊戯王に費や

してきたんだからな。デュエルディスクを腕にはめ、ステージへ上がる。既に試験官は準備をして立っていて、ビシッ！　っと指さして言い放ってきた。

「君が全問正解って言う筆記試験一番か。本当は試験官用のデッキを使わないと行けないんだけど……。どれだけやるのか見てみたい。悪いけど、本気でいかせて貰うよ。」

「……………」（……まずい、声が出ない）

それはどうなんだよ！　とか言ってやりたくなった物の。こ半月くらい、人と話してないことを思い出す。どうやらしゃべり方を忘れてしまったみたいだ。それを試験官は不安に思ったと取ったらしく。口調を緩めてこう続けた。

「ああ、だいじょうぶ。もしデュエルに負けても実技を合格にするかは僕の判断だからね。良いデュエルが出来たらバッチシだよ」

別に強い相手とデュエルするのはOK何ですけどねー。とか言っ
てやりたかったけど声が出ない。仕方がないから諦めることにした。
決闘盤を構える、同じく決闘盤を構えた試験官と目が合った。

「「デュエル
決闘！」」

お互いの決闘盤が展開され、デュエルの準備が出来る。ちなみに俺のディスクにはシャッフル機能が付いている。逆に言えばシャッ

フル機能は俺のにしか付いていない。

「先攻は譲ろう。全力で当たってこい！」

「……ドロー。グリズリーマザーを守備表示で召還。カードを二枚セツトしてターンエンドだ」

「守ってばかりでは勝てないぞ！ 私のターン、ドロー。手札から切り込み隊長を召還。モンスター効果によりさらに手札からレベル四以下のモンスターを特殊召還する。いでよ、コマンドナイト！」

試験官のフィールドに金髪のおっさん兵士と赤い鎧の女戦士が現れる。なかなか良いカードだな、戦士族デッキには使えるからこつちの世界ではどのくらいで買えるんだろ？

「コマンドナイトの効果で場の戦士族モンスターは攻撃力が400ポイントアップする。さらに手札から神剣フェニックスブレードと融合武器ムラサメブレードを切り込み隊長に装備させる。これで切り込み隊長の攻撃力は2700だ！ しかも切り込み隊長を倒さない」と他の戦士族にはアタックできないぞ」

切り込み隊長の両手に一本ずつ剣が現れる。融合武器ムラサメブレードはかっこいいデザインだが融合してしまうのはどうかと思うぞ。あのデッキは装備戦士かな？ なかなか面白いデッキだけどガチではないな、まあそこそこ楽しめそうだ。

「バトル！！ コマンドナイトでグリズリーマザーを攻撃、コマンドスラッシュ！」

グリズリーマザーがコマンドナイトに切り裂かれる。横から見て

るとコマンドナイトを応援したくなるな。

「…グリズリーマザーの効果発動。デッキから攻撃力1500以下の水属性モンスターを攻撃表示で特殊召還する。こい、グリズリーマザー」

「ふっ、固めてきたか。だが次は攻撃表示、ダメージを受けて貰うぞ。切り込み隊長でグリズリーマザーを攻撃」

コイツは伏せカードを警戒することを知らないんだろうか……、思ったほど強くないのかも知れない。

そして二体目のグリズリーマザーも切り捨てられる。しかし今度は応援したくなったりしないな……。

「なに！ ライフが減っていないだと！」

「トラップカード、ガードブロックを発動した。これにより戦闘ダメージはゼロになり、俺はカードを一枚ドロウする。さらにグリズリーマザーの効果発動。デッキからカタパルトタートルを特殊召還」

俺のフィールド上に背中に砲台を付けた亀が現れる、やっとこのデッキの見せ場だ。思う存分に暴れさせて貰おう。

「まあいい、私はこれでターンエンドだ」

案の定トラップは無し、この手札なら何とかなるかな。

「ドロウ、手札からマンジュゴッドを召還。デッキから儀式魔法を手札に加える。俺は亀の誓いを手札に加える。そして強欲な壺を発動。デッキからカードを二枚ドロウする。」

よしっ、そして亀の誓いを発動！ フィールド、手札からレベルの合計が八以上になるように墓地に送らなければならないが、俺は手札のシャドウ・リチュアを墓地に送る。シャドウ・リチュアは水属性の儀式召還のためのリリースをこのカード一枚で行うことが出来るカードだ。現れる！ クラブ・タートル」

フィールドに緑の亀と融合した赤い蟹が現れる。首の所は亀の頭があるべき所に蟹の目が一つ、ぎよろつとくつついている。……ぶっちゃけキモイ。

「最上級モンスターを出してきたか、だがそれでも、そのモンスターの攻撃力は2550。私の切り込み隊長には敵わないぞ」

「大丈夫だ問題な（ry ……手札のアトランティスの戦士の効果発動！ デッキから伝説の都 アトランティスを手札に加える。そして、伝説の都 アトランティスを発動。水属性モンスターの攻撃力を200ポイントアップさせる。これでクラブ・タートルの攻撃力は2750切り込み隊長を上回った。クラブ・タートルで攻撃！」

「ぐううう。しかし、まだ50ポイント。勝負はこれからだぞ」

「残念、メインフェイズ2でカタパルトタートルの効果フィールド上のモンスターを生け贄に捧げその攻撃力の半分のダメージを相手に与える。クラブ・タートルとマンジュゴッドを射出！」

ライフ 3950 1875

マンジュゴッドとクラブ・タートルが光の玉になって試験官に飛

んでいく。二発同時になってるんだが、効果の処理はどうなってるんだ？

「つく、しかしクラブ・タートルを残さなくてよかったのかい。まだ私のライフは半分近く残っているよ」

「残念って言ったろ。永続トラップ、血の代償。ライフを500ポイント払うことでもう一度召還をすることが出来るカードだ。1000ライフ払い、手札からゴラ・タートルと幻影のゴラ亀を通常召還。そしてゴラ・タートル、幻影のゴラ亀をリリース！」

ライフ 1875 525

可愛い系のデフォルメされた亀とその半透明になったバージョンの亀が現れ、光の玉となって飛んでいく。試験官の驚く顔が目に入った。

「これで最後だ。カタパルトタートル！」

ライフ 525 0

カタパルトタートルが光に包まれ、試験官に向かって（ry
光にぶつかった試験官は自ら後ろに飛んだ、んだよね？ リアクションがリアルすぎてほんとにソリッドヴィジョンか解らなくなるな。

何はともあれ俺の勝ちだ。背中を打って痛がっている試験官に一礼してさっさとステージを降りる。さて、スタンドにあがってめばしい生徒をチェックするかな……お、あの娘はなかなかだな。……

~~~~~

「君はもしかして山田和希じゃないか」

良いのが居ないな」と呆れた目で見ていたら声を掛けられた。声からしてあんまり良い予感がしないな」と思つて振り向くと、案の定、エアーマンこと三沢大地だった。……白か黄色じゃないのは新鮮だな。

「ちがう、だいたいデュエルキングがこんな所に居るわけないだろ。」

「俺は別に山田和希がデュエルキングだとは言つてないぞ」

ちっ、面倒だな。どうやって誤魔化すか……

「なんだ四代目デュエルキングと同姓同名の奴が知り合いに居るのか、残念だが俺はその山田和希じゃないぞ、そんなに似てるのか」

「いや、山田和希なんて知り合いは居ない。が、君はデュエルキングの山田和希に似ているな」

「ああ、よく言われるが、帽子を被っているだろう。他人のそら似じゃないか」

「眼鏡だよ、フレームの形が一緒だ、あこの形も似ているしな」

「……実は同じ型を使ってるんだ」

「苦しくなってきたぞ。それに、横のステージから見ていたがああ

ディスクは和希のにしか使われていないシャッフル機能が付いている、プレイングも見事だった」

「ちょっと待て、あのデュエルを見ていたなら解るだろ、キングはあんな亀デッキ使わないって。ディスクだって新しく作ったものかもしれないし」

「いや、俺は知っているぞ。四代目キングの山田和希は気分によってデッキを換えることも。ネットで『遊戯王』デッキ作りの第一歩』と言うサイトを作っていることも。一番得意なデッキが「ちょっと待てーい！」どうしたんだ？」

「何で俺があんなサイトをやっていることをお前が知っている！」

「やっと認めたか。それは、あのサイトで使われているカードの中にチューナーモンスターがあった。チューナーモンスターは四代目キングしか持っていない新しいカード。そのカードを使ったデッキがあると云うことはあのサイトを作ったのはキングしかあり得ないのさ。しかしこれで納得がいった、俺が一番でないのはキングが居たからか。俺はまだまだ君には勝てない、それはあのサイトを見ても明らかだ。しかし、君の理論を取り入れ自分の物としてその上で君を倒す！ 君もアカデミアにはいるというならちようど良い。3年で君を超える！ そして自分だけのデッキ理論を見つけるんだ！ そのためにさっそく帰って研究だ。と言いたいが、一応他の人の試験も見えていくことにするよ」

「お、おおっ……………」

と、いきなりのライバル宣言に軽く引きながらも、三沢の隣に立つ。そうかーチューナーが居たのかー、とかサイトのことを考えて

いると、また声が掛けられた。

「ちょっと話を聞いてたんだけど、本物なの？」

おお、明日香さんじゃねーですかい。隣にカイザーもいるけどまあ良いか。

「本物っちゃん本物だけど、そうで無いとも言えるな」

明日香が眉をひそめる。

「どういう事」

「大会では優勝したけどキングになったつもりはないって事」

実際、納得いってないしね。実際、地元に三代目キングがやって来たのをフルボッコにして次の大会の出場権をもぎ取って、大会で優勝しただけだし。遊戯もキング止めてどっかふらついてるんだろ？

「ちょっと良いか」

ん、今度はカイザーか。

「どうした？」

「いや、それだけの实力があるならどうしてプロにならなかったんだ。スポンサーも沢山出来ただろう」

「正直に言うと、強い奴が居なかったから。本気が出せなくてストレスが溜まる。相手の实力に合わせたデッキを使っても良いんだが。」

たまには全力でやり合える相手が欲しい。で、ここに来たわけだ」

「……此処には強い決闘者が居ると」

「いや、居ない。せいぜい中の上だ。そこで俺が強くなる。デッキの構築法を教える、必要があるならカードをやる、プレイングが悪いなら直させる。それで俺と同レベルのデュエリストまで引き上げる。そこから始めるんだ、俺のデュエルを」

「「「……………」」」

誰も、一言もしゃべらない。俺は会場に目を戻して続けた。

「傲慢だつて言うのは解つてるし、弱い奴からすれば俺はかなりムカつく奴なんだろう。けど！ 戦わずには居られない限界でぎりぎりの勝負を」

再び沈黙が続く。三沢が力強く俺の背中に声を掛けた。

「……俺は、俺は、そこまで上り詰めてやる。お前が居る、プロですら弱いと言える高見まで！」

「そつか……。それじゃ期待してるぜ、大地！」

不意に、涙がこぼれそうになった。やばいな、かつこいいぜお前。

「まった、まった」。受験番号110番結城十代。まだ、試験は終わってないよな。」

入り口から飛び込んできた一人の少年。……まあ十代なんだけど。

を見るとあほらしくて涙が引っ込んでしまった。取りあえず後ろに立ったままの大地に十代を指さしながら言う。

「取りあえず大地、お前はアレに勝ってから俺と戦え」

「なんだ？ 強いのか」

「取りあえず、あの変な先生に勝つ程度にはな。問題は引きの強さだ、俺でも勝てるか解らんな」

「そうか面白い、やってやるぞー！」

「ちよつと、変な先生ってクロノス教諭じゃない。かなりの実力者よ、って言うか彼は知り合いなの？」

「いや、こつちが一方的に知ってるだけだ。今は遊戯にも目を付けられてるな」

「遊戯って、あの遊戯さん！ キングオブデュエリストじゃない、どうしたってそんな人に……」

「さあな、カードに気に入られたとか、俺には精霊なんて見えないからよく判らんけど」

カードって……。と、なんか困惑気味の明日香を横目にデュエルは進む。うん、原作道理のシナリオだな、ちよつと安心した。

さて、これで見るとべき物は見たな。帰るか、発表日までゆっくりしとこつ。あ、サイトの編集しないとな。

## 第一話 俺とカードと実技試験（後書き）

執筆途中の愚痴コーナー

デュエルディスクって打つのめんどい。けど決闘盤は厳つい、どうしようかなー

ほんとにはアトランティス戦士の効果を使ってから壺の方がよかつたんですがね。それだと見せるデュエルにならない。

手札の枚数会ってるよね？ すっげー不安。

ちなみに主人公の容姿はTFの奴に四角いフレームの眼鏡を掛けてます、そんだけ。

感想、お気に入り登録は作者の生きる活力になります。良ければ何か書いてみてください。

## 第二話 俺と十代と三沢大地（前書き）

万丈目のキャラが解んないわー、とか三沢を大地って打つの違和感あるわー、とか翔はこんなにつす、つす言ってたかなーとか考えながら、まあコレでいいか。って感じで投稿。



## 第二話 俺と十代と三沢大地

「人食い虫」

「「し」か。シルバー・フォング」

「グリズリーマザー」

「ぎ、…ザ・キックマン」

今、俺たちデュエルアカデミア高等部新入生はアカデミアへ向かうフェリーに乗っていた。甲板で手摺りに寄り掛かって、大地とだべっているオベリススクブルーの三人組がやってきた。って、よく見たら万丈目か何の用だろうな、だいたい予想は付くが。五メートルほどの位置に來ると、取り巻きその一が言った。

「おい、お前、あの山田和希らしいな」

「だったら？」

いかにも不機嫌そうに顔をしかめて言っでやる。すると取り巻きその二が上から目線で言う。

「いや、お前が頼み込むって言うなら。俺たちの仲間に入れてやるよ」

「しるか、どうでも良いからあっち行け」

「なっ！」

まさか断られるとは思ってなかったのか、口を開けて驚いている。俺としてはどうしてそんなに自信があるんだって感じなんだが。

「万丈目さんは、あの万丈目グループの息子なんだぞ！」

「……だから？」

「だから？　って……」

「言つたる正直どうでも良い。いや、やっぱりジャマだ、どっか行け」

「こいつー」「まてっー！」

取り巻きその一が掴みかかって来ようとする、それを今まで喋ってなかった万丈目が止めた。しばらく俺と万丈目の睨み合いが続く。

「ふんっ、気に食わん奴だ。いくぞっ！」

そう言つて万丈目と取り巻き達は船内に帰つていった。

「何だっただんだあいつら」

「別に、ただの勧誘だろ。どーでもいいいつーの」

万丈目達が出ていったドアをしばらく眺めていたが、視線を海に戻そうとした時、またドアが開いた。出てくるのは……

「なんだ、十代か、翔もいるな」

「なにっ、十代だとー！」

「あ、おい。ちょっと待て……」

十代という言葉に大地が異常に反応して、静止の声も聞かず、ダツシュで“やっぱ、外の空気はうめ〜”とか言ってる十代達の方に走っていった。

「やれやれ」

俺も手摺りから背中を離して大地の後を追う。

「……だが結城十代！ 俺はまだお前を研究し終えていない。しかし、すぐに作ってやるぞお前専用の対ヒーローデッキをな！！」

「アホかお前はっ！」

大地に近づき頭をはたく、予想以上にいい音がした。大地はなんだか恨みの籠もった目で俺を見ていたが無視。視線を驚いてる十代の方に向けて話す。

「悪いな、この馬鹿が迷惑かけた」

返事は聞かずに大地の腕を掴んで手摺りの方へ戻る。さて言いたいことは山ほどあるが……

「アホか。まず最初に、初対面の奴にいきなり名指してライバル発言されたら驚くだろうが。そのくらい考える馬鹿」

「んっ？ それは悪かった。しかし……」

「黙れ。…二つ目、何が「対ヒーローデッキ」だ。そんなことばっ

かりやってるからお前は一番になれないんだ。アンチデッキで勝って何がうれしい。本気でアンチを組むなら勝って当たり前だ。デュエリストって言うのは自分のデッキを突き止めて、その上で苦手なカードの対策をするんだよ。お前みたいに相手によって勝てるデッキに換えてるようじゃ、一生一番には慣れないぞ」

「……それは、…和希だって人によってデッキを換える時があるじゃないか」

「はっつ、アホか。アレは手加減用に作ったお遊びデッキだ。俺のデッキはこの連中には強すぎるんだよ。だいたいお前みたいに対戦する相手を考えてくんだ訳じゃ無い。だいたいお前が作ったアンチデッキは特定の相手には刺さるだろうがそれ以外の奴には脅威性が全くないんだよ」

「……………」

「なあ、ちよつと言いきすぎじゃないか」

意気消沈している大地を見ていた俺に声がかかる。なんだ十代か。

「何だ。って、俺ってそんなに有名か。さっきから知らない奴に名前呼ばれてるんだけど」

「…声に出てたか。お前は結構有名だよ。クロノス教諭にデュエルで勝ってたからな。それと別に言い過ぎってほど話したつもりはない。全部事実だしな」

「……俺は、間違っていたのか……………」

大地が声を絞り出すように言った。

「そ、そんなこと無いぜ。デッキは自分の好きなように作るものだからな。間違ってるのはこの帽子眼鏡だぜ」

(帽子眼鏡つて……)「デッキを作るのに関してはそれに同意するが、全く見たこともないデッキだったらどうするつもりだ。こう言い訳するのか「あんなデッキは今まで一度も見たことがない。一から研究して次こそは勝つ！」アホか、お前はジャンケンでもしてるのか。今まで見たことがないデッキを前にして。「え、あのデッキはグー？ チョキ？ パー？」とか、悩んでるうちに負けて「よし、あのデッキはグーだ。早速パーのデッキを作って再挑戦だ！」って、なんでも一番になかなれるかよ、デュエルはジャンケンじゃないんだ。デュエルモンスターズに最強のカードなんてないし、最強のデッキもない、もしお前がデュエルキングになったとしても前情報がないチャレンジャーにやられるのが落ちだ。ただ、十代が言う通り、デッキを作るのは個人の自由だ。コレからどうするかはお前次第だよ」

「おれは、俺は……」

「ちっ、めんどくせえ。おい十代、ちょっとコイツ見てろ」

大地から視線を外して部屋に向かう。デッキは携帯していてもデュエルディスクは持ってないからな。

「へっ、俺が。って、おい。何処行くんだよ、ちよっと、おゝい……」

~~~~~

「おい、どこ行ってたんだよ。コイツは何も言わないし」

「ほら付ける」

デュエルディスクを十代に向かって放る。驚きながらも俺の腕に付けたディスクを見てにやりと笑った。

「へへっ、ずっと翔とばかりやって飽きてきたんだ」

「アニキひどいっす!!」

「久々にメインデッキを使う。大地、よく見とけよ」

「「^{デュエル}決闘」」

「俺のデッキは先攻有利だが、ハンデだ先攻は譲ろう」

「後悔するなよ……俺のターン。ドロー！……俺はフェザーマンを攻撃表示で召還。さらにカードを二枚セットしてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー。豊穰の女神 アルテミスを召還、カードを五枚セットしてターンエンドだ」

「五枚！ 手札事故でも起こしたのか？ それにアルテミスの攻撃力はフェザーマンを上回っているのに攻撃しないのか」

（攻撃力1000のフェザーマンを攻撃表示で出してる時点で毘だ

と言ってるようなもんなんだがな)

「違うっすよアニキ！ アレは第四代目キングデュエリストも使ったカードで、カウンター罠カードを使うたびにカードを一枚ドロースする効果を持つてるっす。まさかあの眼鏡にデュエルディスク……、間違いないっすよ。何でデュエルキングの山田和希がこんな所にいるっすか!？」

「ちっ、コレじゃあんまし帽子被ってる意味ねーな。コンタクトは好きじゃねーんだよな……」

「すげーぜ、こんな所でデュエルキングと戦えるなんて。俺のターン、ドロー」

「させるか、“強烈なはたき落とし” 相手が手札に加えたカードをそのまま墓地に送る」

「何〜！ おっ。へへっ、良いカードが落ちたぜ」

「アルテミスの効果で俺はカードを一枚ドロースる」

「俺は、墓地のE・HERO ネクロダークマンの効果を発動。手札から、レベル五以上のE・HEROを一度だけ生け贄なしで召還できる。来い！ E・HERO エッジマン」

「残念、キックバック発動。モンスターの召還、反転召還を無効にして手札に戻す。エッジマンには戻ってもらっ。そして、カウンター罠を発動したことによりアルテミスの効果で一枚ドロース」

「そんな〜、俺はもう召還出来ないぜ、ターンエンド……」

「俺のターン。ドロ、手札からもう一体のアルテミスを召還。バトル！ アルテミスでフェザーマンを攻撃」

「今だ、トラップ発動。異次元トンネルミラーゲート。俺のモンスターとお前のモンスターとを入れ替えて戦闘を続ける。フェザーマンとアルテミスを入れ替えるぜ」

「それ通さん。カウンター罠、魔宮の賄賂。相手の魔法、罠を無効にし相手はカードを一枚ドロする。さらに二体のアルテミスの効果で二枚ドロ。…さあ、カードを引け」

ライフ 4000 3400

「フェザーマンが…。ドロ！（よし融合だ）」

「お喜びの所悪いが、また強烈なはたき落とし。手札に加えたカードを墓地に送る。そして俺は二枚ドロ」

「融合まで」

「もう一体のアルテミスで攻撃」

ライフ 3400 1800

「カードを二枚セットしてターンエンド」

（今の手札はバーストレディにスパークマン、エッジマン融合が来れば巻き返せる！）「俺のターン。ドロー！！　っ！　よし、コイツにかける。来いE・HERO　バブルマン。バブルマンの効果発動！」

「悪いがそれも通さない。カウンター罠発動、天罰。モンスター効果の発動を無効にして破壊する、アルテミスの効果で二枚ドロー」

「折角だ、コイツを出さなくても勝てるだろうが……。手札のモンスター効果を発動！　カウンター罠を発動した時、自分フィールド上のモンスターをすべて破壊してこのモンスターを特殊召還する。来い、裁きを下す者 - ボルテニス」

「こ、攻撃力2800……」

「ボルテニスの効果、自信を特殊召還する時に破壊したモンスターの数だけ相手フィールドのカードを破壊する。そのセットカードを破壊。てんのかずち天の雷」

（俺の手札に使えるカードは無い……）「ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー。バトル！　ボルテニスでダイレクトアタック」

「うわあああああっ」

「アニキっ！」

十代がボルテニスの雷を受けてリアクションを取っている。まあそれはどうでも良いとして大地に目を向ける。

「……俺は、お前にいつか強くなって俺を越えるって言われた時うれしかったよ。けど、コイツみたいにデッキに愛着とか拘りとか無く、相手に合わせてデッキを換えて、自分のデュエルって奴を見つけて無い奴に言われても何もうれしくない。もしお前が対俺デッキなんて使ってきたら真っ正面から叩き潰してやる」

言いたいことは言えたので大地に背を向けて歩き出す。コイツとはここまでか、とも思っていたので背中に大地の声がかかった時は思わす口元がほころんだ。

「やっと解った。俺は俺のデュエルをしていたつもりだった。だが和希と十代のデュエルを見て解った。お互いが正面からぶつかり合うことで互いを高め合うことが出来る……俺は相手に合わせて自分のデュエルを出来ていなかった。……コレから俺は自分のデュエルを探す。そしてその道を極めた時お前に挑もう。もう俺は今の俺じゃない、これからは自分のデュエルを極めてやる。だから待つてろ！ 山田和希。いつか俺は自分のデッキでお前を越える！！」

ちらりと振り向いた時に見えたあいつの目は今までにないぐらいの決意が込められていた。今回も振り向かずにはドアに向かいながら答える。

「ああ、待つてるぜ」

「和希！！」

十代の声、ちらりと顔を向けると十代はお得意のポーズを取って

いた。

「ガッチャ！ 楽しいデュエルだったぜ」

「アホか、俺は三ターンで終わって全くつまらなかったよ。せめて十ターン続けるかチェーンを四つ以上積んでから言え！」

チェーンって何だっけとか言ってる十代に大地と翔が教えるのを背にドアを閉める。やっと楽しくなってきた、待ってるデュエルアカデミア。

第二話 俺と十代と三沢大地（後書き）

馬鹿とかアホとか言い過ぎですよね

カード名を“ ”で囲むのは微妙。

ちなみに十代のもう一枚のふせはエレメンタルチャージです。

第三話 十代と万丈目とアンティデュエル（前書き）

主人公がライエローって言う説明をしてなかった……、まあ解るかな？

……ちなみに主人公の名字が山田って言うのは新規小説執筆の時のルビの振り方の例で出てきた山田太郎さんから。

主人公チートドロの回です。つかデュエルするつもり無かったのになぜかやってる無かったらもっとみじかったのに……。

第三話 十代と万丈目とアンティデュエル

その後フェリーは無事、何も起きることなくアカデミアに着き、入学式も終わり。寮で夕食を食べて部屋で休んでいると新入生に配られたPEDに通信が入った。

（万丈目からか……だいたい予想は付くな。けど十代はどうすんだろ）

俺はそれを例の鞆に突っ込んでから通話ボタンを押した。

《「やあ、山田和希く、ん………」ドサッ 「ま、万丈目さん。どうしたん……わあああああつつつ」》

「あんなに大声を上げるなんて可哀想に、誰が一体何をしたのやら」天井しか映っていない画面を見て通信を切る。さて、デッキでも組もうかな……。

~~~~~

カードから目を離して時計を見るともう明日になろうとしていた。そろそろ止めようかと椅子から立ち上がり背筋を伸ばすとパキパキと音が鳴る。そのとき外に方に人に気配を感じた、窓に近寄って外を見ると走り去る後ろ姿が見えた。

「オシリスレッド、あれは十代か、もしかして俺を誘えなかった腹いせか？ それとも二人とも誘うつもりだったのか？ ……万丈目の様子を見てくるのも楽しそうだな」

ささつと準備をしてデュエル場へ向かう。そういえばフレイムウイングマンが左手を使う回だっけ、デュエルディスクは謎の技術満載だな。

~~~~~

「あら山田くんじゃない。どうしたのこんな所で」

「十代がデュエル場に向かうのが見えたからな。それと俺を呼ぶ時は和希でいい、山田は個性がなさ過ぎるだろう」

「……それもそうね。じゃあ和希って呼ばせて貰うわ」

そんなやり取りをしているうちにデュエルは進む、それにしても万丈目はどうしてあんな使いにくいカード使ってるんだ？ 地獄つながりだからってあれはないだろ……俺のネタデッキも人のことは言えないけどよ。

「まずいガードマンが来るわ！ それにアンティデュエルは校則で禁止されてるから捕まったら退学かもよ！」

「なんだって！！ そんな校則聞いてないぜ」

「っ！ もういい、結城十代。お前の实力は解った、試験はまぐれ

だったようだな」

そう言って万丈目と取り巻き達はデュエル場を出ていった、十代は納得行かない様子だったが翔や明日香に強引に連れ出される。俺としては万丈目が俺がいることに気づいた時に一瞬怯えた様子を見ることが出来て満足だな。

~~~~~

「あのまま続けていたら、アンティルールで大事なカードを取られていたんじゃないの？」

学校前まで逃げると明日香が十代に話しかけた。しかし十代はへつと笑って答える。

「いや、あの決闘は俺の勝ちだぜ」

そういつて手に持っていた死者蘇生のカードを見せる、原作通りだな。

「アホか、あのデュエルはお前の負けだ」

「誰だ！ って、何だ和希か。それより俺の負けってどういう事だよ、死者蘇生でフレイムウイングマンを復活させていれば俺が勝っていたはずだろ」

「自分の使っているカードの効果ぐらい覚えろ。E・HEROの融合モンスターは融合召還以外での召還は出来ないって書いてあるだ



る。例外はあるが」

「……………本当だ、じゃあ、あのデュエルは俺の負けなのか……………」

「さあな、クレイマンでも蘇生させて次のターンを耐える事が出来てたらどうなったか解らないだろうな。どっちにしてもあのターンで決着が付くことはない」

「くっそう……………」

「そんなに落ち込むこと無いっすよアニキ。アニキなら絶対逆転出来たっす」

「お前は黙ってる。それで十代、お前は強くなりたいか。お前がそれを望むなら俺はお前のデッキ作りに協力するしカードも渡そう」

「……………少し考えさせてくれ」

「そうか、じゃあな」

（あまり良い答えは聞けなかったか。まあ十代にもプライドがあるんだろうな）

イエロー寮に戻ると部屋の前に大地が立っていた。

「どうしたんだ？ 何か話があるならPEDに連絡を入れればいいだろう」

「新、俺のデッキ一号が完成したから試しにやってみようと思ってな。それに、俺はお前の番号をまだ聞いてないぞ」

「もうこんな時間だし明日に回そうとか考えないのか。それにもう寝てたかも知れないだろ」

「思わないな。それにお前が部屋を出た時の音も聞こえてたからな」

（即答かよ）

「ハア………解った。やろっ」

「ああ！」

~~~~~  
~~~~~

寮を出てデュエルディスクを構える。夜中だというのに薄暗く、大地の顔がはつきり見えた。

「「<sup>デュエル</sup>決闘」」

「大地！ このデッキは小学生でも解る簡単なデッキだ。出して、並べて、殴る。だがそのある意味完成形、子供が使ってもプロデュエリストに勝てるレベルの物だ。しかし、このデッキにもまだまだ上がある、コレに勝てたらお前も上級者に認めてやろっ。俺のターン！ ドロー」

手札からレッドガジェットを召還、効果によりイエローガジェットのを手札に加える。さらにカードを三枚伏せてターンエンドだ」

「除去ガジェデッキか！！ だがデッキの相性はいい。ドロー、手

札から大嵐を発動。フィールド上の伏せカードをすべて破壊する」

（ちっ、ミラフォに幽閉、奈落が破壊されたか。大地もドロー力結構あるんだな）

「危なかったな……俺はハイドロゲドンを召還する。ハイドロゲドンで攻撃！ ハイドロプレス レッドガジェットを破壊。さらにモンスター効果によりデッキからもう一体ハイドロゲドンを特殊召還する。二体目のハイドロゲドンでダイレクトアタック！ カードを二枚伏せて、ターン終了だ」

和希LP 4000 2100

（ちよつとまずいな。あんなに大きな事言っただのにこのまま負けるとかカッコ悪すぎる。）

「……俺の、ターン！ サイクロンを発動！ 場の魔法トラップを一枚破壊する。俺から見て右側のセットカードを破壊だ。」

「くっ、収縮が……」

「戦闘補助か…マシンナーズギアフレームを召還」

「マシンナーズ！？ しかし俺の知らないカードだ。和希はそんなカードをどこから手に入れてくるんだ？」

（未来からだよ。なんて言えないよな）

「ギアフレームの効果、召還時デッキからマシンナーズと名の付くモンスターを手札に加える。マシンナーズフォートレスを手札に。さらに、マシンナーズフォートレスの効果発動。手札から機械族モンスターをレベルの合計が8以上になるように捨て手札、墓地から

特殊召還する。俺はマシンナーズフォートレス自身とイエローガジェットを捨て、墓地からフォートレスを蘇生させる。来いマシンナーズフォートレス」

「攻撃力2500が簡単に……」

「二体のモンスターで攻撃！ ハイドロゲドンを蹴散らせ」

「トラップカードオープン。和睦の使者、このターンモンスターは戦闘では破壊されず戦闘ダメージも受けない」

「ちつ、良く防ぐじゃないか。ギアフレームの効果発動、一ターンに一度、このモンスターは機械族モンスターに装備カードとして装備できる。フォートレスに装備、ターンエンドだ」

「ユニオンモンスターか。俺のターン！ 手札からオキシゲドンを召還。さらに魔法カード、ボンディング・H2Oを発動！ フィールド上のハイドロゲドン二体とオキシゲドン一体を墓地に送りデッキ、手札、墓地からウォーター・ドラゴンを特殊召還する。デッキからウォーター・ドラゴンを特殊召還」

「出てきたか。大地も案外侮れないなあ……」

「バトル！ ウォーター・ドラゴンでマシンナーズフォートレスを攻撃、アクア・パニッシャー。」

「ギアフレームの効果、装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのモンスターを破壊する」

和希LP 2100 1800

「どうだ！ コレが俺のデッキだ！」

「ああ認めるよ、これは認めざるをえない。けどな、まだデュエルは終わってないぞ。俺の……ターン。ドロー！ ここで引くとかどういう事だよ！ 強欲な壺、発動！ カードを二枚、ドロー！ 天使の施し、発動！ カードを三枚ドローし二枚捨てる。貪欲な壺、発動！ 墓地のモンスターを五体デッキに戻し二枚ドロー」

「あの状況から手札が三枚だって！」

「反撃開始だ。手札のD・D・クロウの効果発動。墓地のモンスターを一体除外する。俺はオキシゲドンを選択。さらに魔法カード地割れを発動、ウォーター・ドラゴンを破壊！ ウォーター・ドラゴンのモンスター効果は墓地にモンスターがそろっていない場合は発動しない。これでフィールドはがら空き、フォートレスでダイレクタアタック。ダメージステップ時、速攻魔法リミッター解除、発動！ 自分フィールド上の機械族モンスターの攻撃力を倍にする。行けエー」

「うわああああ」

三沢LP 40000

フォートレスの攻撃が決まり後ろに吹っ飛びリアクションを取っている大地に近づいて声をかける。

「すごかったぞ」

「そ、そうか」

「ああ、ノーダメージで勝ってやるつもりだったのに。こっちがやられるところだった」

「ノーダメージって……」

「で、お前はそのデッキを貫くのか？」

「いや、確かに使いやすいデッキだがまだ決めるには早い。これからも俺の道を究めるために研究し続けるさ」

「そうか、……お前さえよければ俺達がデッキを組む時にお互いにアドバースを出し合わないか」

「良いのか、それは確かにありがたいが俺がお前に意見できるかどうか……」

「いや、第三者の意見って言うのは結構大事なものだ。まあ、最終的に決めるのは自分だけだな」

「そうか、じゃあよろしく頼む。早速だがこのデッキに相性のいいモンスターは居ないか？　どうしてもシナジーのあるモンスターが見つからないんだ」

「今からかよ……もう夜中だぜ」

「デュエルモンスターズするのに時間など関係ない！　さあ、存分に研究しよう！」

「明日から授業だろ、勘弁しろよ」



### 第三話 十代と万文目とアンティデュエル（後書き）

何か納得いかない。そのうち修正入れるかも。つか主人公の性格がうぜえ……、殺すか、上条当麻的な意味で。性格まで変わるか解らんけど。

感想からハイドロゲドンを地砕きで除去していたことを忘れていることを指摘されました。後付で申し訳ないですが、セットカードを増やしサイクロンで破壊する。と言う手段に変えさせて貰いました。

今後こんな間違いがないように気を付けます。



#### 第四話 少女と俺と果たし状（前書き）

オリヒロイン投入。こまめに改行した方がいいのか解らん。

## 第四話 少女と俺と果たし状

結局、部屋に戻った俺はデッキを改造する羽目になった。と言っても俺のデッキは改造するところがありません、大地の知らないカードが多数あったため、後回しにして大地のウォーター・ドラゴンを切り札に据えたデッキを改造してるところだ。

「ちょっと待て！ 恐竜族のサポートはいらないって言っただろう。オキシゲドンの攻撃力はそこそこあるんだしハイドロゲドンは水属性なんだからウォーター・ドラゴンのサポートと共有できる、それなら水属性で使い勝手の良いモンスターを入れた方が事故し難いだろう。だいたい大進化薬に究極恐獣なんて入れると、もうウォーター・ドラゴンいらないじゃねえか！」

「しかしやはりウォーター・ドラゴンは召還に条件があるじゃないか。ハイドロゲドンとオキシゲドンのサポートがあってもH2Oが来ないと出せないなら厳しすぎる」

「さっき使ってたお前が言う事じゃねえな……。だいたいな、今作ってるのはファン、楽しむためのデッキだ。恐竜族デッキなら別に作つてあるし、ウォーター・ドラゴンを入れてるだけならこんなデッキ作っても面白くねえよ。もちろんそこそ強くなるようにするけどな」

「そうか、楽しむためのデッキ……。確かに、強いデッキを作るのに目を向けすぎていたかもしれないな」

「やっと納得したか……。水属性でなかなかの奴はペンギン・ナイト

メアやハイドロゲドンと同じモンスターを破壊した時に効果を使えるフェンリル、アビスソルジャーやアクエリアとかも良いかもしれないな。サルベージはオキシゲドン達には使えないけど場がそろうまでの時間稼ぎにはなるだろ。H2Oは封印の黄金櫃を使うか」

「俺はさっきから聞いてるだけなんだが……。それに十分強いデッキなんじゃないか？」

「なんだよ、じゃあ相性が良いカードとかあるか？」

「そうだな……。破壊輪とか破壊して使うようなカードなんかいいと思うが」

「破壊輪……。そう言えばこっちではまだ制限カードか」

「どうかしたのか？」

「いや、そうだな。そう言うのも面白いな。じゃあ、これなんてどうだ？」

「いや、こっちの方が使いやすいだろう……」

.....この日、眠ることは出来なかった。

~~~~~

少女は一人薄闇の中で立ち尽くす。

うつつ、折角早起して一番に教室に来たのに座る席が自由だなんて……。これじゃあ机の中に手紙を入れて、物を取り出す時に気づいて貰おう作戦！ が使えません。

でも、わたしはこの程度のことではへこたれたりしません！ お姉ちゃんも言っていました、恋と決闘は度胸^{デュエル}だって。

しかし、直接渡すのはやっぱり恥ずかしいです、どうしたらいいんでしょう……。はっ！ こうしている内にも誰かが近づいてくる足音がします。はわわっはわわわっ

ガラガラッ

「あら？ 私が一番じゃなかったのね。結構早く来たつもりだったけど……明かりも付けないでどうしたの？」

「ええと、目が早く覚めまして。あ、明かりのスイッチそこにあったんですね。暗くて気づきませんでした。あはは」

慌てて封筒を背中に隠します、入ってきたのは天上院さん。珍しい名字だったから合ってるはずです。……たぶん。

「？ そつ。まあ良いけど」

そつ言つと天上院さんは机に座って教科書に目を通し始めました。はあ、わたしもそつしよう……。はれ？ 手紙を持つてくることに

気を取られて教科書、と言つか鞆を部屋に置き忘れてきました……。うつつ、仕方ないです。いったん寮に戻って取ってきましょう。

~~~~~

鞆を取って戻ってくる頃には他の生徒達もやって来て、いよいよ授業が始まってしまいました。けど、やっぱりあの人のことが気になって授業になんか集中できません。

あの人が座ってる席を見てみると……って、寝てます！ 初日の授業から寝るなんてどんな神経をしてるんでしょうか。隣に座っている同じライエローの真面目そうな人が起こそうとしてますが、全く動く気配がありません。

先生は注意しないんでしょうか。そう思って前に居るへんてこりんな先生を見ると、あ、オシリスレッドの生徒を睨んでますね。そっちも隣のちっさいこが起こそうと肩を揺すってますが、全く起きる気配がありません、それどころかいびきまで欠いてますよ。

はあ、こんな学校生活で大丈夫でしょうか……。

午前の最後の授業が終わりました。みなさん新しいパックやパンが売っていると聞いて購買の方に行ってしまった。あのオシリスレッドの人はチャイムが鳴ると、すぐに起きて隣の人と一緒に教室を出ていきました。あの人はチャイムが鳴っても眠り続けていた

ので、隣の人も起こすのを諦めて教室を出ていきました。

あれ？　もしかして二人きりですか？

これは手紙を渡すチャンスです！　そつと近づいて教科書に間に手紙を挟むだけ。大丈夫、やれます！　そーつと、そーつと……

「ふあゝゝあ。よく寝たー……ん？」

な、なんで今起きるんですか！　か、かくなる上は…

「こ、これ。受け取ってください！」

「あ、ああ……」

手紙を渡してダッシュで逃げます。うう、お姉ちゃん。わたし、負けてしまいそうです。

~~~~~

「これは、果たし状、か」

さっきの女の子に渡された手紙を見て、ポツリと言う。初日からこんな物を貰うなんて、さすがはデュエルアカデミアだと思う。さっきの子はどこかで見た覚えがある気がするんだが……どこだった

かな。

「和希」

「ん、大地か。どこ行つてたんだ？」

「購買だ、もう昼休みだぞ。ん？ それはラブレターか？」

「違う果たし状だよ。ニヤニヤすんな、気持ち悪い」

「気持ち悪いは無いだろう。それに果たし状って…そんな花柄の奴があるか」

「あるんだよ、それが。結構前に山ほど買った、畜生。こっちは期待して……いいや、飯食おうぜ、何買ってきたんだ？」

「あ、それは俺のだ。自分で買って来いよ」

「うつせえ、誰のせいで寝過ごしたと思ってるんだ。迷惑料払え」

「な、俺のドローパンが」

「げふ……納豆とかマジ勘弁……」

「和希……」

もうドローパン買わね。まてよ、大地が買ったから納豆なのか、そうなのか。……でも、納豆の可能性があるだけで買う気が起きないな。

第四話 少女と俺と果たし状（後書き）

ああ、デュエルの所まで行きたかった。でもその体力はねえ……

気長にやりますか。

お知らせ

今回、小説を書かせて貰っているのですが、作者は現在中学三年生。

これまでも時間を見つけてちまちま書いてきたのですが、さすがに受験に専念しないといけないので、しばらくパソコンの使用を自粛することにします。

取りあえず三月の公立入試まではパソコンが使えないので、それまで更新することは出来ません。暇を見つけてノートにネタをメモしておくつもりですので四月になれば上がるかも……。

簡単に言ってしまうと三月までは更新はお預けです。……こういうお知らせの文章を考えるの苦手だなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6735o/>

遊戯王GX どうしてこうなった.....

2011年4月6日12時38分発行